

3年次学士編入生のニーズに合わせた就職支援の実態報告

—教員主体から学生主体へ—

沖村 愛子* 木村 理加 田中 加苗 小山田恭子

Report on Measures to Improve Employment Support Based on the Needs of Third-Year Students in the Accelerated Bachelor of Science in Nursing (ABSN) Program — Shifting from Faculty to Student-Initiated Activities —

Aiko OKIMURA* Rika KIMURA Kanae TANAKA Kyoko OYAMADA

[Abstract]

Students enrolled in the third year of the accelerated bachelor of science in nursing (ABSN) program in our university need to start job search activities from their first year of enrollment. These students are characteristically in need of information suitable to their diverse backgrounds, including their previous experience and situation including their raising children. Considering these situations, the faculty of the university had led a series of meet-ups for such students, mainly to improve information collection. This year, we worked on building a framework that would enable students to take the initiative to hold meet-ups and collect information. As a result, the relationship between students who are starting the job search activities and senior students who have already finished these activities was established. This made it possible for students to exchange information on a daily basis, and helped students start their job search activities early based on their own backgrounds. Although we obtained positive feedback on the meet-ups with ABSN graduates, the findings also showed future issues in employment support for students. This paper also reports the issues to be addressed in the future.

[Key words] Accelerated Bachelor of Science in Nursing (ABSN) Program, Employment Support, ABSN Graduates, Meet-Ups

[要 旨]

本学の3年次学士編入生は入学初年度から就職活動を開始する必要がある、かつ、入学前までの経験や育児中であることなど多様なバックグラウンドにあわせた情報を必要としているという特色がある。そのためこれまでは学士編入担当教員主導で、主に情報収集を目的とした学士編入生同士の交流会を開催してきた。今年度はさらに学生が主体的に交流会を開催し情報収集できるようなシステムを構築する試みを行った。その結果、就職活動を始めた学年と既に就職活動を終えた上級生との関係構築が進み、日頃から情報交換が可能になったことで、早々に自分のバックグラウンドにあわせた就職活動を開始する一助となり、卒業生との交流会への肯定的なフィードバックが得られた。一方で、学生の就職支援における今後の課題も明らかになったため、本稿で報告する。

[キーワード] 学士編入、就職支援、卒業生、交流会

I. はじめに

聖路加国際大学看護学部では、2017年度より看護学以外の学士号を取得した者を対象とする2年間の3年次学士編入制度を開設している。在學生は講義と実習の期間を空けずに、座学と実践の学びを関連させながら学べるという特徴がある。一方で、就職先の検討や、仕事・職場に対する価値観の形成に関連する看護学実習¹⁾²⁾での経験を経る前の、入学年度の7月頃から就職活動を開始するという特徴もある。また、他分野で社会人経験のある学生から就職活動が初めての学生まで多様なバックグラウンドがあり、子育てをしながら働ける急性期病院や、前職を活かして看護師として働ける分野や企業に関する情報が欲しいなど、卒業後の進路へのニーズも様々である。よって、3年次学士編入生特有のニーズに合わせた就職支援が求められており、その一環として、学士編入担当教員（以下、学編担当教員）主導のもと、本制度の卒業生と在校生の交流会を開催してきた。その成果として、昨年度の交流会について、卒業生の就職活動の進め方や就職後の体験、進路の多様性を知ることでは在學生の就職活動のイメージ化につながる効果があったこと、夏期休暇前に開催してほしい、少人数グループでの交流にしてほしい、学士編入生特有の進路選択のポイントを知りたいなどのニーズがあることを報告した³⁾。さらに、ニーズには学生全員に共通するものと、年齢や育児・介護などの生活状況により特定の学生に限定されるものがあった。これらを踏まえた上で、対象の特徴にあわせた支援を行うことで、より学生のニーズに合致したサポートが可能になると考えた。

また、昨年度の教員としての支援活動を通して、学生個々の特徴に合わせた支援を安定的に提供するには、卒業生とのコネクションを拡充させることで幅広い情報提供の準備性を高めることと、学生がその情報を主体的に得られる場を持てるような環境づくりが必要で、それこそが自立性が強みである学士編入生に適切な就職支援体制であることが考えられた³⁾。

学士編入生の中には前大学でキャリアガイダンスを受けたり就職活動を行ったりした経験がある者も含まれる。その強みを活かして主体的な就職活動ができるよう、3年次学士編入生向けの就職活動支援システムの確立を目指し、取り組んだ活動内容と成果について報告し、今後の課題について述べる。

なお、本論文の投稿にあたり、学士3年生へのアンケート結果の公表については、アンケートに同意の有無に関する質問項目を設け、承諾を確認した。また、交流会で語られた就職活動および就職後の体験や卒業生の感想、意見の公表について、卒業生および学士4年生から同意を得た。

II. 就職活動支援のシステム構築の概要と実際

就職活動支援システム構築に向けて、学編担当教員はまず卒業生および在校生の連絡窓口を設け、2021年度卒業生および在校生に各学年2～3名ずつ連絡係を選任するよう学生に依頼した。そして、連絡係と協力しながら前期までの期間に就職活動支援となる交流会を2回実施した。それぞれ学生の主体性を活かしながら、教員主導の就職活動支援ではなく、学生主導で情報交換を可能にするシステムになるよう工夫を行った。交流会の詳細を以下に記す。

1. 学士3・4年生交流会の概要

1) 参加者の募集方法および実際の参加者

新学期開始時期に、学編担当教員から学士4年生の連絡係に対し、4月中旬に学士3・4年生の交流会を開催したいという意図を説明した。その後、連絡係から学士3・4年生へ参加を呼びかけ、参加者を募った。学士3年生は全員参加、学士4年生は25名程度が参加した。

2) 学士3・4年生交流会の開催日程および開催方法

第1回交流会は4月中旬の平日に18時から1時間開催した。開催形式は昨年オンライン交流会を開催した際に対面での希望が多かったことから³⁾、対面での開催とした。学士4年生のうち4名が自主的に運営係を担い、企画運営を行い、交流会の内容については適宜教員が相談を受けて検討した。また、運営係が主体的に同級生へ呼びかけ、学士4年生全員と学編担当教員の自己紹介スライドを作成した。理由としては、当日不参加の学士4年生についても紹介したいこと、通常マスクをしているので顔が分かる写真を表示したいとのことであった。当日は運営係が司会を行い、前歴および学士3年生への一言メッセージが含まれたスライドを用いて、学生の人柄が伝わるエピソードを適宜追加しながら自己紹介を行った。教員ではなく学生が司会進行を行うことで、緊張感が少なく穏やかな雰囲気の中、場を盛り上げた。その後、学士3年生は一人ずつ自己紹介を行った。交流会の後半は、年齢や子育て中などバックグラウンドが近い学生が集まるよう、運営係がグループ編成を行い、グループ内で自由に話せる時間を設けた。内容については、前期科目や勉強の方法、実習に関する話題が主であった。

3) 上級生との交流会開催後

第1回交流会開催後、学士4年生より「夏期休暇の時期に就職活動について情報共有を行いたいので、第2回交流会を開催したい」との提案を受けた。第2回交流会の実現に向けて学士4年生の運営係が主体的に企画を行ったが、学士3・4年生の授業および実習日程上スケ

ジュール調整が難しく、オンライン上で学士3・4年生が情報交換できる場を設けたとの報告を受けた。具体的には学士3年生からの質問をGoogle Formで集計し、それに対して学士4年生の連絡係が同級生に共有して回答するという形式であった。質問内容は、後期の授業や実習について（乗り越え方、大変だったことなど）、就職活動について（インターン参加の有無、病院選択の基準、受験した病院の数、就職試験対策）などであった。

2. 卒業生との交流会の実際

6月初旬、学士3年生から学編担当教員に対して、40歳以上あるいは子育て中に就職活動をした先輩の体験を聞きたいという相談があった。学生は大学事務の就職支援担当部署へ、該当する卒業生を紹介してもらえないかと相談したが、卒業生とは個別にコンタクトはとれないとの返答であったため、学編担当教員に相談するように促されたとのことであった。この学生のニーズに対して、在学生の力だけでは卒業生とは繋がれないと判断し、教員も関わる形で交流会を開催することにした。ただし、学生の主体性への配慮として、交流会当日の進行は学生とし、教員は卒業生および就職活動を終えた学士4年生へコンタクトをとる役割に留めた。

1) 参加者の募集方法および実際の参加者

話題提供者として、教員が連絡可能な卒業生にメールで連絡をとり、今回の交流会開催の意図を伝えた上で協力を依頼した。参加に同意した卒業生に対し、同級生への連絡を依頼し、さらなる協力者を募った。結果、卒業生6名、学士4年生2名の参加が決定した。学士3年生の参加者については、同学年の運営係が同級生に交流会の目的や対象について連絡を行い、希望を募った。結果、学士3年生の参加は30名中18名で、中には40歳以上あるいは子育て中という条件には該当しないが参加を希望するという学生も数名含まれた。

2) 卒業生との交流会の開催日程および開催方法

卒業生との交流会は、交流会の開催を希望した学士3年生が中心となり企画および運営を行った。卒業生との連絡は教員が行い、交流会の内容や運営について、適宜教員が相談を受けながら計画を行った。日程は前期科目が一段落した7月中旬の土曜日に設定した。開催形式は卒業生の協力者に希望を確認した結果、オンラインと対面のハイブリット方式に決定した。

3) 交流会の流れ

交流会当日の司会進行は学士3年生が行った。まず卒業生および学士4年生の自己紹介および事前に学士3年生から挙げられた質問に対する回答について全体共有を

行った。その後、グループに分かれて自由に質問できる時間を設けた。1つのグループあたり卒業生および学士4年生2～3名に対し、学士3年生5～7名程度の割合で、3つのグループに分かれた。3名の学編担当教員も一人ずつ各グループに参加した。学士3年生の運営係が、急性期病院を希望する学生、子育て中の学生など背景や希望がマッチングするよう事前にグループ編成を行った。1回のグループディスカッションは15分程度で、メンバーを変更して2クール実施した。

4) 実際の話題

実際の話題は以下の4つに関する内容が主であった：①40代以上の就職活動および就職後の体験談（「面接官に当院は40代以上の就職は難しいとはっきり言われた」「病院説明会などの公の場で年齢制限について教えてくれないが、インターンなどの機会ではこっそり教えてくれた」「体力面での負担は事前に言われていたが、確かに厳しい」など）、②リアリティショックとその乗り越え方（「学士は他の業界を知っているからこそ、看護業界の独特な世界観に苦しめられることがある」「年下の看護師から人格否定をされるような辛辣な言葉を言われることもあった」「乗り切るコツは柔軟に対応してまずは1～2年はすべてを受け入れること、自分の意見が言えるようになってから思ったことを伝えたと内に秘めておく」「先輩に歯向かうのではなく同期と共有してストレス発散する」など）、③学士編入生特有の就職活動について（「学士は入学間もなく開始する人もいるが、早ければ良いというわけではない」「小児領域など就職試験時点では未実習の段階であっても、自分の意向を伝えることができれば問題ない」など）、④子育て中の学生の就職活動について（「職場見学の際に夜勤専従の有無を聞いた」「勤務開始と終了時間を質問して子どもの迎え時間と照らし合わせて検討できるようにした」「ライフワークバランスや職場へのアクセスなど自分の求める勤務条件について明確にした上で病院選択を行った」）。

Ⅲ. 就職相談交流会への参加者からの感想、意見

上述の就職相談交流会に参加した学士3年生に感想や意見をフィードバックしてもらい、次回以降の改善点を検討する目的で、交流会後Google Formsを使用したwebアンケートへの協力を依頼した。アンケートは交流会の運営や内容への5段階評価（「満足」「やや満足」「ふつう」「やや不満」「不満」）項目と、意見や感想の自由記載項目で構成した（表1）。アンケートは15名の学士3年生から回答が得られた。

表1 交流会後のフィードバックアンケート項目

	質問項目	回答方法
1	交流会の開催時期（夏期休暇前7月中旬）	5段階評価
2	交流会の所要時間（約1時間）	（回答任意）
3	交流会の開催方法（対面&Zoom）	
4	参加した卒業生からの情報量や内容	
5	全体的な満足度	
6	特に役立った点	自由記載
7	今回40歳以上または育児中の学生を対象としたことについての意見	（回答必須）
8	改善した方がよい点	
9	その他の意見・感想	自由記載 （回答任意）

1. 交流会の開催時期などの5段階評価について

回答者15名のうち1名は会に不参加だったため5段階評価は未回答であった。よって14名の学生からの評価を単純集計した結果、交流会の所要時間については「満足」「やや満足」と回答した学生の合計が78.6%と低めだったが、他の項目は90%以上の学生が「満足」または「やや満足」と回答した。その中で、卒業生からの情報量や内容および開催方法については、「満足」「やや満足」と回答した学生の合計が100%だった。全体を通して「やや不満」と「不満」の回答は無かった。（図1）

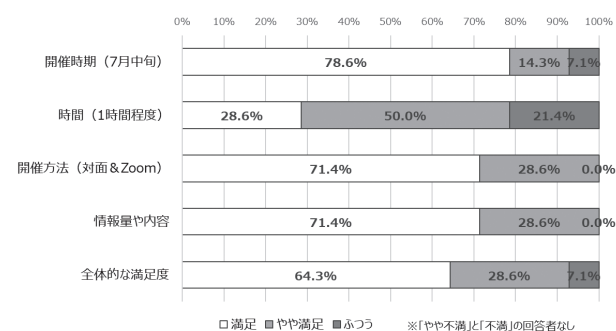


図1 交流会参加学生からのフィードバック結果

2. 交流会のなかで特に役立った点について

交流会で特に役立った点への回答で最も多かったのは、参加者にとって時期的に差し迫ったテーマであったインターンシップに関するものだった（4件）。そもそも「インターンシップに参加した方がよいか」といったことから、「インターンシップに参加した時期」「インターンシップの内容」「インターンシップに参加していないと選考にのれない病院」について詳しく聞いたことが役立ったという意見であった。

続いて就職活動の「具体的なスケジュール」を聞いたことが役立ったという感想が見られた（3件）。また、スケジュールだけでなく、「就職活動にどんなことが役立ったか」「応募した病院について」「就活を終えての実感」「就職先を選ぶ視点」など、さらに詳細な点についても具体的な話を聞くことができ役立ったという感想も

あった。

今回の交流会の主旨に沿ったものとして、「年齢幅の広い病院」「年齢による壁がある病院」「40代の就職の実態」「リアルな現状」などを知ることができて役立ったと、40代で就職活動を経験した先輩に話を聞いたことの意義を複数の学生が感じていた。また、情報提供者が就職活動だけでなく就職後の体験も具体的に共有したことを受けて、「就職してからの現場での実際」「就職後のリアリティショック」「入職後どんなことが大変そうか」といった、実際に働き始めてからの学士編入生（特に40代）ならではの困難さについて聞いたことが役立ったという意見も見られた。

今回の交流会が「40歳以上または子育て中の学生」を対象としたことへの肯定的な意見としては、「実際に就職活動されていた先輩方の意見は凄く貴重」「対象を絞ることで聞きたい情報を得ることができた」「年齢的な問題や子育て中という点は就活する上でどうしても付いて回ると思うがお伺いする機会も少ないので有り難かった」などの、普段の情報量の少なさをカバーできたというものであった。中には、対象外であったが参加して参考になったという感想もあった。

3. 交流会の改善点について

交流会の改善点について、最も多かった意見は「開催所要時間」についてであった。「もっと時間をかけて個人の質問などを受け付けてほしい」「時間が足りなく十分にお話を聞けなかったので、次回はもう少し時間を長めにとってもいい」などの意見が複数見られた（6件）。中には、「15分の区切りもよかったが、20分のほうがより詳しく聞けたと思う」と、1時間のなかの時間の使い方についての提案も得られた。

「開催時期」については、「7月上旬」あたりの「夏のインターンシップ準備前の開催であれば、選択の準備ができたと感じる」という意見が出された。

交流会の対象者については、「対象を狭めず色々な先輩からの就活体験談を聞きたい」という意見もある一方で、「30代も後半からは就活がかなり難しくなるので、30代向けグループを作ってほしい」「①社会人経験が長かった先輩方②社会人経験が数年の先輩方③大卒ストレートの先輩方などのグループに分かれてもいい」「『40代以上&ママさん』『男性看護師の先輩』『聖路加病院に入職された先輩』などに分けて開催するとよりフォーカスした内容を聞ける」など、今回はまた別のカテゴリでの交流会開催を希望する声があった。

4. そのほかの意見・感想について

そのほかの意見・感想は任意回答としていたが、11件の回答が得られた。その中には、さらに知りたい情報と

して、病院選びの参考にするために「学士卒業生の就職実績一覧を頂きたい」、「学士4年生から就活スケジュールを聞きたい」という希望があった。

他には、入学年度の後期終了後には就職活動をすることに不安があったが「この会に参加したことで、意識すべきことや今やっておくべきことなどがわかるようになった」「何度かこのような交流会があったら、安心材料にもなりそう」など、行動指針が得られることで先々への不安が多少解消されるという意見が得られた。一方で「今回の機会がなければ何の危機感もなく就活に臨んでしまっていたかもしれない」と自身の見通しの甘さを痛感している学生もいた。

さらに「就職説明会では学士向けの情報が少ない」「学士として学ぶことは出来ても、年齢によって就職という出口が限定される閉塞感は何とかならないものか。せっかくの看護師として働きたいという志を、大学も医療業界も尊重してほしい」といった、学士編入生および年齢や社会人経験を重ねている新卒学生の多様さに、看護界が十分対応できていないことへの指摘も見られた。

5. 卒業生の感想、意見

上記アンケートとは別に、交流会終了後、情報提供者の卒業生より、「話す側としても15分という時間はあっという間に感じるほど短いものであった」と開催時間に関する感想が寄せられた。また、次の機会では、参加卒業生の都合が許せば60分ではなく90分で設定すること、各自の予定に併せてその後は自由解散で、対応可能な卒業生が個別に対応するという流れでもよいのではないかという提案もあった。開催方法としては、オンラインよりも対面の方が参加者の表情がよく見えて、卒業生としての率直な意見が言いやすかったということであった。一方で、卒業生の発言によって、参加在校生が現実の厳しさを知り、暗い気持ちになっていないかという心配があるということも共有された。

6. 交流会への評価と感想に関するまとめ

参加学生の開催後のアンケート結果は、全体的に肯定的であった。フィードバックの内容を踏まえると、対象者およびテーマを焦点化したことが、参加者にとっても情報提供者にとっても効果的に働いたと考えられる。さらに、今年は対面での参加を可としたことで情報提供側も話しやすくなったということで、その分情報の量・質ともに厚くなり、参加者の満足度に貢献したと推察される。

会の開催所要時間は、昨年度に引き続き課題である。今後も対面で実施が可能な場合、卒業生の提案のとおり、60分間は導入でその後30分間は都合がつく参加者だけで自由に、といった開催方法は早々に実現可能である。卒

業生と初対面の関係性である以上、就職活動という個人的で繊細な情報を共有するには、まずは在学生の側の遠慮があると思われ、60分間で情報提供者を中心にやりとりする中で関係構築が進み、その後の30分でより深く聞く、といった流れが満足感が高くなる可能性がある。

今回は、時期的に差し迫っていたインターンシップや、今後の就活スケジュールに関する情報が得られたことへの満足感も去ることながら、40歳以上という年齢による就職の困難さ、さらに40歳以上で新卒看護師として就職したあとの困難さをより具体的に知る機会となったことへの肯定的意見が目立っていた。就職後に遭遇する困難を就職前に知れたことで卒後への準備性は高まったとはいえるが、中には看護界への問題意識を表出する学生もいた。

卒業生から提供された就職活動時または就職後の経験に関する情報は、同席していた教員にとっても初めて聞くような内容もあり、その過酷さにいたたまれなくなるようなものもあった。より現状に沿った就職支援を実現するため、これまで学士編入プログラムを修了した卒業生たちの就職後の実態を広く聞き取っていく必要性が感じられた。

IV. 今後の課題と展望

入学後早期に情報提供の機会がなかったという昨年度の課題を踏まえ、今年は4月時点で学士4年生との交流会を開催し、学業や就職活動のスケジュールを中心に情報交換を行った。その結果、学生はニーズにあった情報にタイムリーにアクセスすることが可能となり、学業と並行して就職活動をどのタイミングで力を入れて行うべきか、活動に充てやすい時期はどこか、学士編入生特有の就職活動における困難な点を入学年度前期の内に把握し、対処することができていた。その後も継続して学士3・4年生間で情報交換を行い、普遍的な情報について学生自ら情報収集する中で、自身のバックグラウンドにあわせて更に必要な情報は何か明確となり、卒業生との交流会に関して学生からの主体的な相談へと繋がった。今後も、学生が主体的に就職活動を学業と並行して進められるよう、学年間を超えたネットワークを構築する機会を入学直後から作ることが有益であると考えられる。

教員と卒業生とのコネクションを維持することにより、様々なバックグラウンドをもって就職活動を行った体験のある卒業生、様々な場で活躍する卒業生と在学生との体験共有が可能となった。学生が、入学初年度から就職活動を行わなければならないという現状を自分事として考え、主体的に取り組むにあたり、同じ体験をもつ卒業生から生の体験を聞く機会は動機付けとなる。また、様々な就職先での卒業生の働き方を知ることで、自分に

あった就職先とはどのような所か、就職先を選ぶにあたり自分なりの基準を作る一助となると考える。よって、教員は今後も在学生や卒業生と積極的に交流し、コネクションを維持できるよう活動していく必要がある。

また、交流会後アンケート結果には課題や要望が寄せられており、教員が学生と卒業生からの声をもとに要点をまとめて連絡係にフィードバックすることで、次年度の活動がより学生のニーズにあったものになると考えられる。

一方で教員は、学生の主体性を大切にしつつも、連絡係を担う学生が過負荷となっていないか、交流会開催を学生が企画運営するにあたって開催時期が適切か、学業とのバランスを保てるよう注意を払う必要がある。例えば、今回の交流会のアンケート結果において、開催時期について7月上旬開催を求める声があったが、例年この時期に、学士3年生は実習や看護展開を集中的に学ぶ演習が行われる。教員は授業の進捗状況と学生の知識習得の具合を考慮しながら、学生にとって無理のない開催時期や方法を今後も慎重に決定する必要がある。

V. おわりに

今年度、教員が各学年に連絡係を作り、卒業生とコンタクトをとれるようネットワークを構築した。その結果、学士編入生自ら、学士3・4年生間で日頃から情報交換を行う中で、対象を限定した就職支援を目的とした上級生・卒業生との交流会を発案し、企画運営することで9割以上の学生が満足感を得られていた。今年度構築

した就職活動支援システムは、学生の主体的な就職活動に有効であり、今後もこのシステムを維持していくことが望ましい。

就職相談交流会の協力者の語りには就職活動後の非常に過酷な体験が含まれていた。第3年次学士編入生は4年制学部生と比べ、職業変更に対する困難感や抵抗感の低さがあることが報告されており⁴⁾、早期離職や看護職への失望につながらないよう教員として在学中に支援できる内容を検討するとともに、就職後に必要な支援内容を発信していく必要性を認識した。今後、リアリティショックへの対策や就職後にどのような点に注意した支援が望まれるのか、卒業生の就職活動中と就職後の体験について実態調査をする必要があると考えられた。

引用文献

- 1) 濱田維子, 二重作清子. 看護大学生へのキャリア支援の取り組みと課題. 純真学園大学雑誌. 2015;4:95-105.
- 2) 村上真須美, 小林昭子, 廣森直子ほか. A大学学生の就職先決定に影響を及ぼした要因と就職支援の課題. 日本ヒューマンケア学会誌. 2018;11(1):18-27.
- 3) 木村理加, 沖村愛子, 田中加苗ほか. 入学年度から始める3年次学士編入生への就職支援 卒業生とのオンライン交流会を通して. 聖路加国際大学紀要. 2022;8:24-9.
- 4) 齋藤あや, 下田佳奈, 川端愛ほか. 看護学というセカンドキャリア形成を目指す学士3年次編入学プログラムの評価. 日本看護科学学会学術集会講演集. 第41回; 2021 Dec4-5; web開催, 日本.